

2022年9月10日

今月のひとこと

## 【Vol.237】 今月のひとこと

今月の  
ひとこと

最近気が付くのは本当のプロのアドバイザーが必要だという声が増えてきているということです。正直、「遅すぎた」というのが私の実感です。退職後のための資産形成、そして退職後の資産活用がそれぞれの人々の人生を通じて極めて重要な課題になっている今日、知識、経験そして高い倫理観を持つ專業のプロのアドバイザー、金融商品の販売に一切関わらないアドバイザーというものが今ほど強く求められていることはないと思います。



もちろん金融商品を「販売する」のは非常に重要な仕事であり、それに従事する人々はその仕事にプライドを持ってお客様のために働いている方も多くと思います。しかし、そうでない方も多く、生活者の方からもそのような声をたくさん聞きます。

販売という業務とアドバイスという業務は違う仕事です。アドバイザーはアドバイザーとして誇りを持って仕事をする。販売員は販売員としてプライドを持って仕事をする。それが非常に重要だと思います。

なぜ本物のアドバイザーが今必要なのか、以下の三つのポイントを指摘したいと思います。

まず、第一のポイントです。

インベストメント・チェーンという言葉をご存じでしょうか。今日、日本の生活者のすべては投資家です。皆さんが気付いていても、いなくても資産の一部は有価証券に投資をされているのです。年金資金も株式を保有しています。皆さんが加入している保険も株式を保有しています。実は皆さんは社会全体をおおうインベストメント・チェーンの一部を構成しているのです。そのインベストメント・チェーンというの以下のようなサイクルです。

生活者（投資家）⇒金融機関(販売員・IFA) ⇒アセット・オーナー（年金基金など）⇒資産運用会社⇒売買執行者（証券会社など）⇒投資先企業⇒生活者(投資家)

このチェーンが意味することは、生活者である皆さんが金融商品を買うため金融機関に支払ったお金が投資信託や年金基金などにプールされ、それを資産運用会社が運用する。運用会社の指示に基づいて証券会社などで売買が施行される。投資先企業が社会に付加価値を生み、それがその企業の価値の増加につながる。そしてそれが株価の上昇及び配当金などで生活者である皆さんの元に戻ってくる。これがインベストメント・チェーンです。

問題は、この出だしのところにあります。生活者（投資家）と金融機関(販売員・IFA) の関係という問題です。生活者一人一人は、このチェーンでそれほど大きな影響力を持つわけではありません。むしろ金融知識も一般にはそれほど高くなく、販売員をアドバイザーであると信じてその言うことを無条件に聞いてしまうことが多い。

一方で、金融機関は膨大な人、物、金で影響力を持っています。あらゆるメディアで宣伝広告を行い、立派な会場で講演会を行い、膨大な数の販売員を抱え営業活動を行っています。

問題は生活者である投資家と販売サイドである金融機関の間には本質的な利益相反関係があるということです。つまり、両者の間では利害が相反するのです。しかし両者の間の力の差は歴然としています。その結果として、弱者である生活者=投資家が、弱い立場に立たされているというのは事実です。

ここになぜアドバイザーが必要かという理由があるのです。つまり「**アドバイザーは生活者に寄り添う形で金融機関との間のパワーバランスを調整する**」。このバランスを調整することこそ生活者の金融知識の向上にも繋がり、また金融機関の本当に顧客本位の営業姿勢が進められることになるのだと思います。

このように考えると新しい資本主義と資産所得倍増計画という二つの目的のリンクの役割を果たすのが、これまで存在しなかった業界としての専門アドバイザーだと言えると思います。

さて第2番目の問題点に移ります。生活者にとって人生で最も重要なことはその生活者本人の幸福感が最大化されるということです。幸福感にはいろいろな要素があると思いますがお金はその一つにしか過ぎません。つまり長い人生の過程で常に寄り添って人生全体についてのアドバイスを提供し続けていくというのが本来のアドバイザーの姿です。

一般的に言って金融機関の営業マンの顧客との付き合いの期間は比較的短期ですし、また、営業マンが生活者本人の望む人生について完全に理解しているかどうかというのも疑問があります。一般論として営業マンが行うアドバイスは短期的視点に基づいたものも多いのは否めないのではないのでしょうか。

その結果として人生を通じての資産運用とかけ離れた資産配分になっていたり、非課税口座が十分に活用されていなかったりすることもしばしばあるようです。投資家が許容できるリスク以上の資産をたくさん保有してしまったり、短期のトレード銘柄を勧められ、それを買ってしまったりすることもあるでしょう。少し上がると売却をする、反対に下がっても損切りを勧める。そのたびに売買を執行する側は収益を得ます。それは皆さんの大切な退職後資産の流出です。何十年も通じて中立的な、どの金融機関からも独立した、そして本当にお客様ファーストのアドバイスを提供し続ける人生の伴走者が必要なのです。

3番目の点はアドバイザー・サイドの問題です。本物のアドバイザーが守らなければいけない守備範囲はお客様の人生全体を通じての非常に幅広い分野に関わっています。どのような人生を送りたいのかということから始まるライフプラン、そしてその一部であるマネープラン、さらにまたその一部である資産運用のプラン、お金をどのように幸福感に変換していくかという最も重要なプロセスにも関わっていくべきものです。

複雑化した世の中で最終的に幸せな人生を送るためには、金融商品を販売するという比較的限定された目的とは別のもっと幅広い人生論や人生哲学などをしっかり持ったアドバイザーが必要になってきます。

また、投資に関するアドバイスについても多くの改善が必要です。今までのアドバイスは、むしろその時々相場環境やテーマなどに合わせたジャッジメンタルなものが多かったように思います。長期的な資産運用にとって、その時々魅力ある銘柄やテーマなどを追いかけるのはよくなく、もっと冷静に長期的視点で見た資産運用が必要なのです。

私は良い長期的投資方針は理論的整合性と実証的有効性を併せ持ったものだと思っています。それは勘と度胸の投資とは全く違うものです。残念ながら、これまで日本ではそのようなポートフォリオ分析を行うツールも極めて初歩的なものに限定され、それも十分に使われていたとは言えません。ここに現在、皆様から貴重なご寄付をいただき、充実を目指しているポートフォリオ分析ツールの開発の理由があるのです。「みんなのお金のアドバイザー協会~FIWA®」では、日本の生活者=投資家のためになる資産運用が安心安全を可能にするインフラストラクチャーが必要であるという認識のもと、そのツール面での装備を充実し、本物のアドバイザーを育成し、認定、支援していく活動を続けていきます。どうぞこれからもご支援の程を宜しくお願い致します。



## FIWA®からのお知らせ・セミナー予定

### FIWA®マンスリー・セミナー #204

開催形式: On Line

開催日時: 9月18日(日) 12:30～15:30

講演・講師: 岡本 和久「日本株式市場144年史」

三和 裕美子氏、太田 達也氏:「兜日本株価指数 発表報告」

備考: お申込みは以下のサイトにて承ります

<https://happymoney.stores.jp/>

---

### 第57回FIWAサムライズ勉強会

開催形式: On Line

開催日時: 10月7日(金) 開催時間 19:00～20:45

講演・講師: NISA・イデコ投資はインフレに勝てるか 長期データで検証

日本経済新聞社編集委員 田村 正之氏

備考 主催: NPO法人みんなのお金のアドバイザー協会

お申込先: <https://somerise.net/2022/09/06/1488/>

---

### FIWA®マンスリー・セミナー #205

開催形式: On Line

開催日時: 10月16日(日) 12:30～15:30

講演・講師: 岡本 和久「株式会社の歴史」

河口 真理子氏:「日本におけるSRI、ESG投資の歴史(仮題)」

備考: お申込みは開催日の三週間前より以下のサイトにて承ります

<https://happymoney.stores.jp/>

---

### FIWA®マンスリー・セミナー #206

開催形式:On Line

開催日時:11月20日（日） 12:30～15:30

講演・講師: 岡本 和久 「お金の歴史」

青山大学院大学客員教授、ニッセイアセットマネジメント投資工学開発センター長

吉野 貴晶氏 「『ダウの犬』戦略などを検証する（仮題）」

備考 お申込みは開催日の三週間前より以下のサイトにて承ります

<https://happymoney.stores.jp/>



今月号の記事をすべてダウンロードす

このページを印刷する

カテゴリー

今月のひとこと

タグ

【Vol.237】 2022年09月15日発行



📅 2022年9月10日

FIWAマンスリー・セミナー講演 1

## 【Vol.237】石井 総一郎氏講演

「ボクらの日本一周どんぶらこ きびだんご配って四千里」

講演：石井 総一郎氏  
レポーター：赤堀 薫里

### 石井総一郎（達也）氏

株) Social Relation Trust Partners 代表取締役 共同代表  
コーチングオフィス『Two-Me-Key “つみき”』代表



1981年8月26日生まれ、岡山県倉敷市出身。元々は現場で交代勤務をしていた作業員だったが、現在はFPとして専門家の方々とも連携を取り、個人や法人に対して総合的な資金計画を立てたり、サポートをしている。人生を変えたいと一通の手紙を出したことをきっかけに日本を代表する二人の投資家にお会いし、二人の対談本である『投資の極意は「感謝のこころ」』（PHPパブリッシング）の出版プロデュースをすることとなる。その後、日本一周の旅をし、その体験をまとめた『ボクらの日本一周どんぶらこ』（吉備人出版）を出版。

ブログ：<http://ishiisouichiro.net>

私は、個人や法人の方のお金の相談を受けて、それを仕事にしています。私自身、今までこうした仕事をずっとやっていたのか？というところと全然違います。現場作業員をしていました。今とは全く違う仕事です。ただ、さまざまな出会いや、自分が知った行動が、どんどんいろいろな結果を出していき、いろいろな形になって、このような仕事にたどり着いたのです。

私は会社を辞めてすぐに、地元以外の日本のことを何も知らないと感じ、友人と二人で日本1周の旅に出ました。出身地が岡山なので桃太郎にちなみ、きびだんごを配って歩いたのです。

きびだんごを交わす中で400人の人と出会いました。大阪の方とお会いした時のことです。お金のことをお仕事にされていて、世界中を飛び回っていた方でした。この人はきびだんごを配った時に、「今まで食べたことがないような高級寿司屋に連れて行ってやる」と素晴らしいカウンターのある、非常に高いお値段のお寿司屋さんに連れて行ってもらいました。

その時に、お話いただいたことはすごく勉強になりました。言われたことは、「知識と知恵」という話です。「お前はこれから知恵をつけていきなさい」と言われました。皆さんは知恵と知識の違いをご存知ですか？僕は正直わからなかった。その方に「何が違うんですか？」と聞いたところ、「お前の親父とお前だ」と、とんちみたいなことを返されました。



「それはどういう意味ですか？」と聞き返すと、「知識は学問的なこと。知っているか知らないかということだ。知恵とは、それをしっかりと行動に移したものだ。おまえの親父は、自分が得た知識も自分が経験したものの両方をおまえに教えたはずだ。ただそれはお前にとっては知識でしかない。だからその教えてもらったことを、しっかりと行動に変えて、知恵に変えないといけない。

この旅自体が知恵ではないか。いろいろな行動をすることで学ぶことはたくさんある。だから知識だけを得るのではなくて、しっかりと知恵にしなさい」と言われたのです。そして、「社会人になるといろいろな人からよく、『私、お金がない。時間がない。人脈がない』、それで話を終わらせる人がいる。でも、ないから人は考えて、そこから知恵が生まれるんだよ」ということも教えてもらいました。

そして、「お前の食べているのは青森県大間の大トロだ。ここで使われているお米は新潟だ」と話を続けます。大間の大トロも青森にしかない。新潟のお米も新潟しかないわけです。でも大阪で大間の大トロと新潟のお米のお寿司を食べたいと思ったわけです。「そんなものない！ではなくて、ないけれどやってみよう！ではどうすればいいのか？」ということで、出来たこのお寿司は智慧の結晶だ」ということも教えてくれました。



その言葉がずっと私の頭から離れませんでした。今日の僕のお話は、僕の知識でもあり知恵でもありますが、皆さんにとっては知識にしかならないので、これを是非皆さんの知恵に変えていただきたいと思っています。

私が日本一周をして気づいたことはお返し文化です。いろいろな人がいろいろなモノで返してくれました。もちろん400人お会いした中で、何もモノを持っていない人もいました。でもその人たちは「お返しできずすみません」と謝ってきました。謝るようなことでも何でもないのに。僕がただ遊びで少しご縁のしるしに配っているきびだんごです。それに対して謝っていただいた。

そして多くの人から、僕が配ったものよりはるかにいいものを頂きました。こういうことが根付いている文化に私たちは生きてるのであれば、いいことも悪いこともちょっと増えて返ってくるんだろうなということに気づきました。私はこの旅を通して、自分がしたことは人からしてもらえることになるんだなと感じました。

澤上篤人さんや竹田和平さんから教えてもらった言葉は、「あなたが絶好調の時に人に対して行った振る舞いが、あなたが絶不調の時に人からされる振る舞いです」でした。その時、お二人から「今のお前の調子はどうだ？」と聞かれましたので、『私は絶好調です』と、答えました。『だったら、その時に自分がしている行いこそが、自分が次にやってくる絶不調の時に人からされる振る舞いだ。だからこういう時こそ、人に対する振る舞いを大切にしなければいけないよ』ということを教えていただきました。ずっと一本調子で絶好調の人はいないと思いますし、絶不調の人もないと思います。こういったことを考えて人と接すること、それが大切なのだなあと気づきました。

今日は投資の話を中心にすることはありませんが、株価を見てもそうなのかなと思います。自分の心のあり方が天国や地獄を作りだしてしまうのだと思います。私はきびだんごを配って全国のいろいろな人とお友達になりました。また一通の手紙によって自分の人生が変わりました。皆さんにとっての一步を、精一杯踏み出せていますか？100の知識より1の行動といわれています。それは知恵だと私は思っています。今日のお話を何でもいいので、何か一つ行動に移して自分の知恵に変えてみてほしいなと思います。

講演では、投資を知るなら日本一の人から学びたいという思いで、竹田和平さんと澤上篤人さんに10枚の便箋に思いを込めて手紙を出したことから、大きく人生の転換期を迎えられ、知識を貪欲に学びながらも、その知識を次々と知恵に変えられた足跡をお話いただきました。

このページを印刷する

2022/09/10 15:58

【Vol.237】石井 総一郎氏講演 | FIWA通信 インベストラライフ® | 「みんなのお金のアドバイザー協会～FIWA」

カテゴリー FIWAマンスリー・セミナー講演 1

タグ 【Vol.237】 2022年09月15日発行



📅 2022年9月10日

FIWAマンスリー・セミナー講演 2

## 【Vol.237】土井 広文氏講演

「庭の草を食べて生き延びた極貧からの脱出ストーリー」

講演 土井 広文氏  
レポーター 赤堀 薫里

### プロフィール

土井 広文氏 みんなお金持ち お金学校主催

1975年8月22日生。食べ物が買えない程の貧困を体験し「お金とはいったいなんなのか？」と疑問を抱いた事がきっかけとなりお金について学ぶ。そしてわかったことは貧困の原因は「お金の事を知らな過ぎた」という事。それから岡本和久先生と出会い、直接投資を学び分かった事は投資に関して「難しい知識」は不要だと言う事。学んだ事を周りに共有する事でみんなのお金が増える事を体験。多くの方がお金の不安を抱えているこの日本で専門知識がない普通の人でも無理なく増やせるお金の話しを伝え広めるべく活動。無料メルマガ配信や月刊誌「ザ・フナイ」にお金と投資に関する記事を連載中。公式サイト「みんなお金持ち お金の学校」を運営。



私の経験を通して学んだことで、これからの人生において、大事だなと思うことについてお話していきます。お金そのものに関する本を読む中で、お金とは自分が消耗した価値が記録された紙であるということを知りました。経営者さんであれば、お客様に提供した価値の量。お勤めであれば、お勤めの会社に提供した価値の量が記録された紙だということです。

価値とは何かというと、嬉しい気持ちの変化ですね。例えば、洋服を買ったとします。布切れ自体にお金を払っているわけではなくて、この服かわいいとか、おしゃれだなという気持ちの変化に対してお金を払っています。車を買ったとすると、車を買うことによって生活が豊かになる、その気持ちの変化に対してお金を払っています。また、映画を見に行った時は、面白かった、感動したという気持ちの変化に対してお金を払っています。全ての消費行動には、意識しようとしまいと、嬉しい気持ちの変化が伴っているということを知りました。



今思えば当たり前のことだなと思いますが、当時の私には新しい発見でした。貧乏を経験する前にも何度か株式投資をやったことがあります。何をやっているかわからない会社の株価を追いかけて、売ったり買ったりの博打のような投資をしていました。この発見が投資を正しく理解することとなりました。儲かりそうな会社ではなく、世の中に必要とされている会社に投資をすればいいのであり、儲けはその後の話であるということがわかりました。

お金とは、投資とは、豊かさとは、こういうことなんだろうと、自分の考え方がまとまってきたころに出会ったのが、岡本先生のピギーちゃんの紙芝居でした。自分なりに漠然と考えてきたことと同じことが、紙芝居の中に完全な形で語られていました。しかもそれが子供に伝えるためのものでした。この紙芝居で語られるお金とは感謝のしるし。お金持ちは感謝もち。お金はご縁のネットワーク。お金だけでなくそのほかにも健康・家族・友達・趣味・社会貢献と6つの富のお話。ハッピー・マネー分法など、どれも豊かに幸せに生きていくために大切なお話でした。それが子供にも理解できる紙芝居になっています。

今は貧困が問題になっていますが、貧困は持っているお金が少ないことが問題ではなく、お金のことを知らないことが問題だと思っています。私は極限の貧乏だった時に、自分が貧乏なのは、会社のお給料が少ないからだとか、政治が悪いから、家が貧乏だからだと自分以外の誰かのせいだと思っていました。でも原因は全て自分にありました。お金のことを知らな過ぎたというのが原因でした。

今年から高校で投資の勉強が始まります。しかし『投資の勉強=お金の勉強』ではないと思っています。投資の勉強というのは、お金という分野の一部だということです。投資の目的はお金を得るためのものですが、その前に、これから手に入れようとしているお金とは一体何なのかを知ることが、とても大切なことだと思っています。手に入れようとしているお金が、何なのか。どうすれば世の中を流れるのか。もっと言うと、どうすれば自分に向かって流れるのか。このお金を理解することで、初めて投資を理解することができると思います。お金が何なのかかわからず投資の勉強をしてもあまり意味のないことだと思っています。

今後、お金の知識はますます重要になってきます。日本は30年間にわたってお給料が上がっていないと言われていますが、そんな中でも、税金や社会保障費用、物価がどんどん上がってきます。何も学ばなければ、どうしても将来お金に困ることになると思います。そのためお金の勉強は、本当に大切だと思います。私が極限の貧乏から脱出する過程で学んだこと。それはお金を知ること。大切なのはお金の量ではなくて、お金の知識とその取扱い方法を知ることです。

これについては多分学校では教えてくれないと思います。貧困を経験した時に、『なぜこんな思いをしなけければいけないのか』と思いました。あの時があって、今こうしてお金の話ができるようになりました。あの出来事がなければ今の自分はありません。辛い出来事は、将来の幸せのために起こると思っています。子供の頃、私は作文が大嫌いで、いつも放課後に居残りさせられていました。しかし、今は文章を書く仕事をしています。文章を書いて、感謝のしるしも頂いています。毎月私の記事を楽しみにしてくださっている方が大勢います。『土井さんの記事のおかげでお金の不安がなくなりました』とも言ってもらっています。

これから皆さんは、夢に向かって社会に出ていくことになると思いますが、その中で『なぜこんな思いをしなくてはならないのだろう』と、思うことが多々あるかもしれません。でも全ては未来の自分が幸せになるための神様からの宿題だと思っています。大きく成長した未来の自分が待っていると思いますので、楽しみながら夢に向かって困難という宿題を乗り越えていってほしいと思います。

講演では、食べ物を買えないほどお金の困窮した経験をつまびらかにお話いただきました。また、そこからお金と真摯に向き合い、お金について学んだことで、見事脱出した経緯や、お金を知ることの重要さと、お金について学ぶべきポイントを示唆いただきました。

このページを印刷する

カテゴリ

FIWAマンスリー・セミナー講演 2

タグ

【Vol.237】 2022年09月15日発行

2022年9月10日

トリビア・コーナー

## 【Vol.237】知って得する、ちょっと差がつく トリビア・コーナー

トリビア研究家 末崎 孝幸

1945年生まれ。1968年一橋大学商学部卒業、同年日興証券入社。調査部門、資産運用部門などを経て、日興アセットマネジメント執行役員（調査本部長）を務める。2004年に退職。

Facebook上での氏のトリビア投稿は好評を博している



### がま口（の由来）

金属製の口金を持つ布袋状の財布を「がま口」と言うが、これはガマガエルのように大きく開く「口」（開口部）を持つためである。

がま口は日本独自のものという印象があるかもしれないが、実は明治期に日本にやってきた舶来品だ。明治政府の御用商人だった山城屋和助は、明治4年兵器を輸入して陸海軍に納入する条件で、政府から借金をして欧州に渡った。その時に、当時のフランスで流行していた西洋式のがま口の鞆や財布を持ち帰り、それらを模倣して売り出した。これが日本でのがま口の始まりといわれている。

### 総スカン（の由来）

皆から嫌われること、また、誰からも同意が得られずに孤立することを「総スカン」という。この言葉、カタカナで書かれることが多いため、その語源が分かりにくくなっているが、実は、すべてを意味する「総」と、好きではないという意味の関西の方言「好かん」が合わさってできたものだ。

「総スカン」は、昭和になってから、関西中心に使われるようになった比較的新しい言葉である。

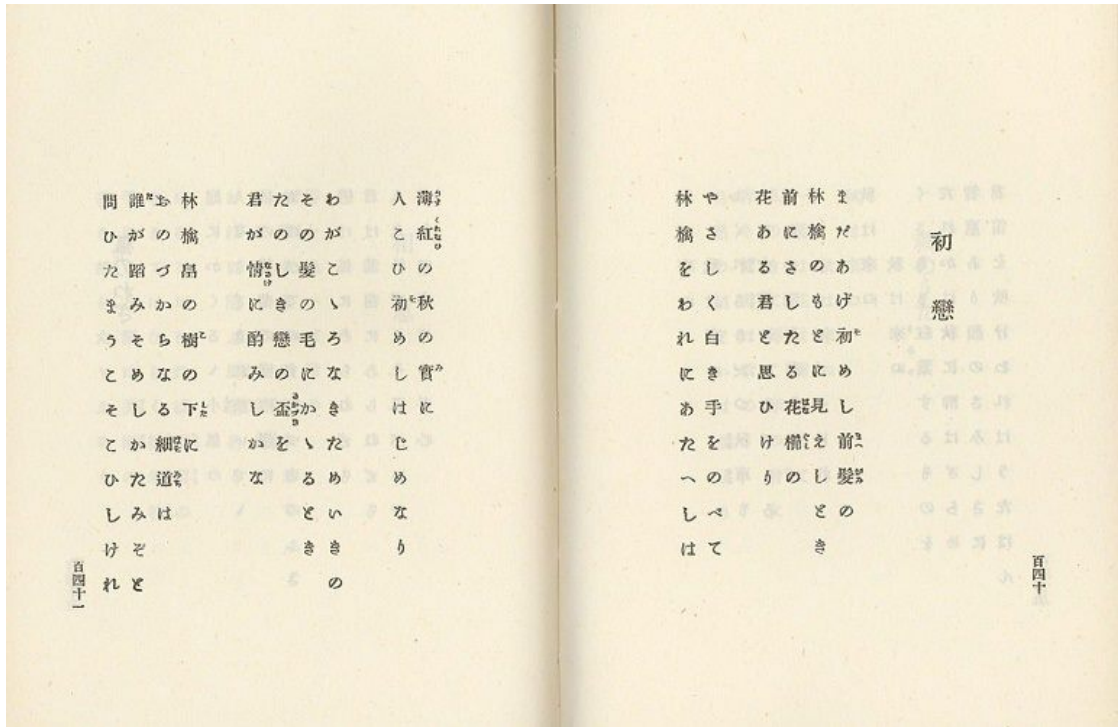
### なぜ「中国地方」と呼ぶのか

平安時代、政治の中心は京都にあった。そのため、この周辺を「畿内」と呼び（「畿」はみやこ、天皇の直轄地という意味）、菅原道真が左遷された太宰府（外国との交渉の窓口となる役所があった）のある地方を「遠の都」と言っていた。

つまり、「畿内」と「遠の都」の中間にある地方という意味で「中国地方」というようになったのである。

現在の中華人民共和国は「中心の国」の意で「中国」と呼んでいるが、わが国の中国は「中間の国」という意味である。

### 初恋（若菜集）



中学生の頃、島崎藤村の詩「初恋」を読んだときの胸の高鳴りはいまだに忘れることができない。藤村の詩集「若菜集」を教科書の中に挟んで学校に持っていき、休み時間に読んでいたのはもう60年以上昔のことだ。

まだあげ初めし前髪の／林檎のもとに見えしとき／前にさしたる花櫛の／花ある君と思ひけり・・・

現在、大学1年生の孫娘に「中学生のころの愛読書は？」と訊くと、返ってきた応えは「ハリーポッター」。隔世の感がある。

**斉唱**

洋画家・小磯良平の代表作に「斉唱というのがある。モノトーンの静謐な画面、裸足で制服姿の9人の女学生がひたむきに歌っているのは賛美歌だろうか（小磯はクリスチャンだった）。



描かれたのは太平洋戦争開戦直前の昭和16年。実はこの頃、小磯は従軍画家として戦争記録画を手がけていた。「斉唱」にはやむを得ず軍に協力したことへのあがないの気持ちが入められ、平和を待ち望む祈りが込められていると言われてきた。

また、この絵は三浦綾子著「銃口」のカバー絵としても採用された。20数年ほど前に読んだ時、他の三浦作品のものとはまったく異なるカバー絵ただけに強く印象に残っている。

追記・・・この絵の女学生は神戸松陰女子学院といわれている

このページを印刷する

カテゴリー トリビア・コーナー

タグ 【Vol.237】 2022年09月15日発行



📅 2022年9月10日

FIWA認定会員 投稿コーナー

## 【Vol.237】FIWA認定会員 投稿コーナー

内田英子（CFP,FIWA\*）さんのブログより「社会の変化から見るつみたて投資の有効性」

\* 金融商品の販売を行わないアドバイザーに与えられる称号です

今号よりFIWA認定会員の方の投稿をご紹介しますコーナーを掲載します。

第一号は内田英子さん、松山で活躍しているホンモノのアドバイザーです。5回にわたって紹介させていただきます。

寄稿：FIWA®協認定正会員 内田英子  
CFP、FP1級、消費生活アドバイザー

FPオフィス幸せ家族ラボ代表。証券会社、保険ショップ勤務を経て、独立。かつての専業主婦経験も活かしながら、子育て世帯を中心に家計の総合医として暮らしの健康を維持するあらゆる選択のアドバイスを金融機関から完全に独立した立場で行っている。

HP : <https://fplabo-happyfamily.com/>

Instagram : [https://www.instagram.com/eiko\\_fp/](https://www.instagram.com/eiko_fp/)



投資信託などの金融商品を毎月定額でこつこつと買付けしていく「つみたて投資」。

つみたてNISAが始まった2018年から、つみたて投資に関心を持つ方が増え、利用者は増加しています。

最近ではつみたてNISAをはじめiDeCoや累積投資、投資信託積立サービスやロボアドバイザーなど、つみたて投資がスムーズに実現できるさまざまな仕組みが複数存在しています。中でもつみたてNISAやiDeCoは、ルールに従って活用すれば配当金や譲渡益など、本来であれば課される儲け分に対する税金が非課税になるという「おトクさ」があり、特に注目を集めています。

一方、つみたて投資は資産形成の手段の一つですから、続けることが大切です。

しかし、最近では利用者急増の副作用でしょうか。勢いでつみたて投資を始めたものの早々に止めてしまったという方も散見されるようになってきました。

わたしは日頃家計相談を業として行っていますが、とにかくみんながいいと言っているから“なんとなく”始めたけれど、本当に大丈夫か、と意見を求められることも少なくありません。

そこで今回の記事ではあらためて、将来のためにつみたて投資は本当に有効なのか。

近年の社会の変化を3つ挙げ、その有効性を一緒に考えていきたいと思います。

### 1. 人口減少社会での少子高齢化の進展



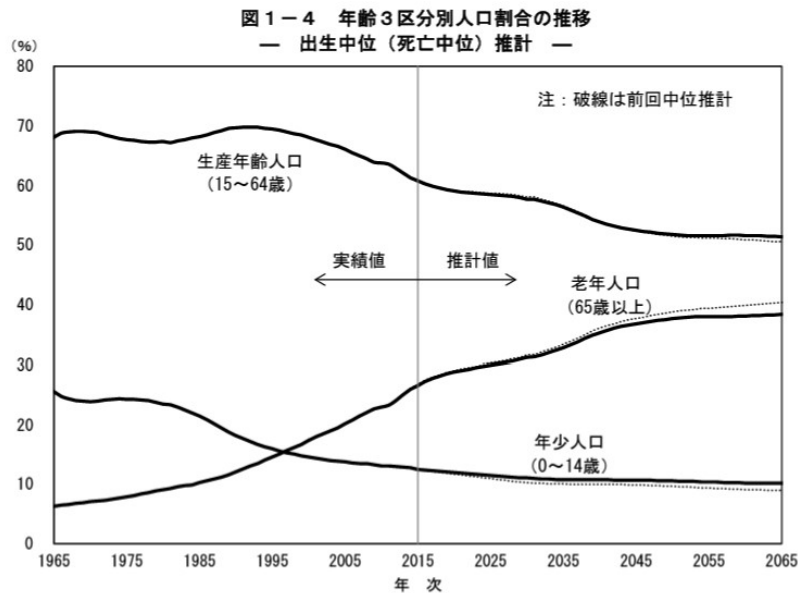
2. 「暮らし」の個別化
3. 国民負担率の増加
4. まとめ

## 1. 人口減少社会での少子高齢化の進展

総務省統計局「人口推計（2021年（令和3年）10月1日現在）」によれば、2021年の日本の総人口は1億2550万2千人で、前年に比べ64万4千人（-0.51%）減少しました。日本の総人口のピークは2008年の1億2808万人で、以降減少に転じています。

また2065年には8,808万人になると予想されており（国立社会保障・人口問題研究所2017年推計、中位推計）、人口減少社会が到来しています。

加えて少子高齢化も進んでいます。65歳以上の人口割合は2021年では28.9%ですが、今後40年間でおよそ2.5人に1人の割合まで増えることが予想されています。（以下の図を参照。）



（出典：国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口（2017年推計）」）

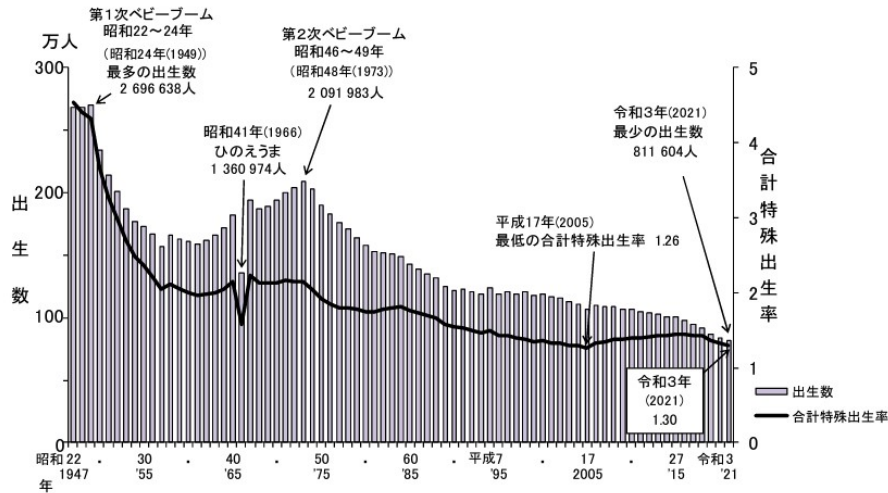
国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口（2017年推計）」によれば、2015年の26.6%、およそ4人に1人の割合から、2037年には33.8%でおよそ3人に1人、2065年には38.4%とおよそ4割を65歳以上が占めると予想されています。

高齢化の進展する背景には、寿命の延びと出生数の低下があります。2021年の出生数は最少の出生数となり、15歳～49歳までの1人の女性が仮にその年次の年齢別出生率で一生の間に生むとしたときの子どもの数にあたる「合計特殊出生率」は1.30と、前年の1.33より低下しました。

ちなみに合計特殊出生率は1947年をピークに、以降70年以上低下傾向にあります。寿命も70年以上伸張しています。日本人の平均寿命は、1947年は男性50.06歳、女性53.96歳でしたが、2021年には男性81.47歳、女性87.57歳でした。（2020年比では男性は0.09歳、女性は0.14歳短くなりました。）



図1 出生数及び合計特殊出生率の年次推移



(出典：厚生労働省「令和3年(2021) 人口動態統計月報年計(概数) の概況」)

当然ながら生きていく上ではお金が必要です。より手厚い老後資金の準備の必要性和、今後は社会の経済活動を維持していくために、より長く働くことが求められることが推察されます。

## 2. 「暮らし」の個別化

それぞれの家族のかたちも大きく変化しています。厚生労働省「2019年国民生活基礎調査」によれば、1986年、最も多い家族のかたちは41.4%を占める「夫婦と未婚の子のみの世帯」でした。ところが2019年には「夫婦と未婚の子のみの世帯」は28.4%となり、最も多いのは28.8%を占める「単独世帯」つまり「おひとり様世帯」でした。また、孫と祖父母が同居する三世代世帯は1986年には15.3%ありましたが、2019年には5.1%にまで低下しています。

今は多くの世帯が分離しています。それにより老後など、勤労収入が見込めない時期にも、たとえ血縁といえども多くの方が経済的な援助を受けづらい環境にあることが推測されます。

表1 世帯構造別、世帯類型別世帯数及び平均世帯人員の年次推移

	総数	世帯構造						世帯類型			平均世帯人員	
		単独世帯	夫婦のみ の世帯	夫婦と 未婚の子 のみの世帯	ひとり親と 未婚の子 のみの世帯	三世 代帯	その他 の世帯	高齢者 世帯	母子世帯	父子世帯		その他 の世帯
		推計 (単位: 千世帯)										
1986 (昭和61)年	37 544	6 826	5 401	15 525	1 908	5 757	2 127	2 362	600	115	34 468	3.22
'89 (平成元)	39 417	7 866	6 322	15 478	1 985	5 599	2 166	3 057	554	100	35 707	3.10
'92 ( 4)	41 210	8 974	7 071	15 247	1 998	5 390	2 529	3 688	480	86	36 957	2.99
'95 ( 7)	40 770	9 213	7 488	14 398	2 112	5 082	2 478	4 390	483	84	35 812	2.91
'98 (10)	44 496	10 627	8 781	14 951	2 364	5 125	2 648	5 614	502	78	38 302	2.81
2001 (13)	45 664	11 017	9 403	14 872	2 618	4 844	2 909	6 654	587	80	38 343	2.75
'04 (16)	46 323	10 817	10 161	15 125	2 774	4 512	2 934	7 874	627	90	37 732	2.72
'07 (19)	48 023	11 983	10 636	15 015	3 006	4 045	3 337	9 009	717	100	38 197	2.63
'10 (22)	48 638	12 386	10 994	14 922	3 180	3 835	3 320	10 207	708	77	37 646	2.59
'13 (25)	50 112	13 285	11 644	14 899	3 621	3 329	3 334	11 614	821	91	37 586	2.51
'16 (28)	49 945	13 434	11 850	14 744	3 640	2 947	3 330	13 271	712	91	35 871	2.47
'17 (29)	50 425	13 613	12 096	14 891	3 645	2 910	3 270	13 223	767	97	36 338	2.47
'18 (30)	50 991	14 125	12 270	14 851	3 683	2 720	3 342	14 063	662	82	36 184	2.44
'19 (令和元)	51 785	14 907	12 639	14 718	3 616	2 627	3 278	14 878	644	76	36 187	2.39
		構成割合 (単位: %)										
1986 (昭和61)年	100.0	18.2	14.4	41.4	5.1	15.3	5.7	6.3	1.6	0.3	91.8	・
'89 (平成元)	100.0	20.0	16.0	39.3	5.0	14.2	5.5	7.8	1.4	0.3	90.6	・
'92 ( 4)	100.0	21.8	17.2	37.0	4.8	13.1	6.1	8.9	1.2	0.2	89.7	・
'95 ( 7)	100.0	22.6	18.4	35.3	5.2	12.5	6.1	10.8	1.2	0.2	87.8	・
'98 (10)	100.0	23.9	19.7	33.6	5.3	11.5	6.0	12.6	1.1	0.2	86.1	・
2001 (13)	100.0	24.1	20.6	32.6	5.7	10.6	6.4	14.6	1.3	0.2	84.0	・
'04 (16)	100.0	23.4	21.9	32.7	6.0	9.7	6.3	17.0	1.4	0.2	81.5	・
'07 (19)	100.0	25.0	22.1	31.3	6.3	8.4	6.9	18.8	1.5	0.2	79.5	・
'10 (22)	100.0	25.5	22.6	30.7	6.5	7.9	6.8	21.0	1.5	0.2	77.4	・
'13 (25)	100.0	26.5	23.2	29.7	7.2	6.6	6.7	23.2	1.6	0.2	75.0	・
'16 (28)	100.0	26.9	23.7	29.5	7.3	5.9	6.7	26.6	1.4	0.2	71.8	・
'17 (29)	100.0	27.0	24.0	29.5	7.2	5.8	6.5	26.2	1.5	0.2	72.1	・
'18 (30)	100.0	27.7	24.1	29.1	7.2	5.3	6.6	27.6	1.3	0.2	71.0	・
'19 (令和元)	100.0	28.8	24.4	28.4	7.0	5.1	6.3	28.7	1.2	0.1	69.9	・

注: 1) 1995(平成7)年の数値は、兵庫県を除いたものである。  
 2) 2016(平成28)年の数値は、熊本県を除いたものである。

(出典: 厚生労働省「2019年国民生活基礎調査」)

### 3. 国民負担率の増加

国民負担率とは、社会保障負担と租税負担を合わせたものが国民所得に占める割合です。その割合は50年以上拡大傾向にあります。

全体から見て国民の担う、税金・社会保障負担が重くなっていることがわかります。

年度	租税負担率①	社会保障負担率②	国民負担率③=①+②	財政赤字④	潜在的な国民負担率⑤=③+④	国民所得(兆円)
1970(昭和45)	18.9	5.4	24.3	0.5	24.9	61.0
1980(昭和55)	21.7	8.8	30.5	8.2	38.7	203.9
1990(平成2)	27.7	10.6	38.4	0.1	38.5	346.9
2000(平成12)	22.9	13.1	36.0	9.5	45.5	386.0
2010(平成22)	21.6	15.7	37.2	11.0	50.1	361.9
2019(令和元年)	25.8	18.6	44.4	5.3	49.8	400.6
2020(令和2)	28.2	19.7	47.9	14.9	62.8	375.7

(財務省「国民負担率(対国民所得比)の推移」より著者作成)

2022年までの更新データはこちらでご覧いただけます(編集者)

一方、家計の収入・支出、貯蓄・負債などを毎月調査、発表している「家計調査」では、実収入に占める可処分所得割合もまた50年以上減少傾向にあることがわかります。

「実収入」は預貯金の引出など実際の財産高には変化のない見せかけの収入を含まず、財産高を増やす収入のことです。「可処分所得」は実収入から税金や社会保険料や借金返済にともなう支払い利息など、家計の自由にならない「非消費支出」を差し引いたあとに残る金額です。

1975年には91.3%だった可処分所得割合は、2020年には81.3%になり、およそ10%減少しています。

生活者が担う家計が自由に使えるお金は、収入額は増えつつも実際に自由に使える割合が減少しており、日々の暮らしにおいてはさまざまな取捨選択が必要となっている状況が推測されます。

年次	世帯人員 (人)	有業人員 (人)	実収入		非消費支出		可処分所得			黒字		消費支出	
1965	4.13	1.53	65,141	100.0	5,584	8.6	59,557	91.4	100.0	10,222	17.2	49,335	82.8
1975	3.82	1.5	236,152	100.0	20,644	8.7	215,509	91.3	100.0	49,477	23	166,032	77
1985	3.79	1.57	444,846	100.0	71,153	16	373,693	84	100.0	84,204	22.5	289,489	77.5
1995	3.58	1067	570,817	100.0	88,644	15.5	482,174	84.5	100.0	132,510	27.5	349,663	72.5
2005	3.46	1.66	524,585	100.0	83,429	15.9	441,156	84.1	100.0	111,657	25.3	329,499	74.7
2010	3.41	1.66	520,692	100.0	90,725	17.4	429,967	82.6	100.0	111,653	26	318,315	74
2015	3.39	1.73	525,669	100.0	98,398	18.7	427,270	81.3	100.0	111,891	26.2	315,379	73.8
2016	3.39	1.74	526,973	100.0	98,276	18.6	428,697	81.4	100.0	1,119,106	27.8	309,591	72.2
2017	3.35	1.74	533,820	100.0	99,405	18.6	434,415	81.4	100.0	121,358	27.9	313,057	72.1
2018	3.32	1.78	558,718	100.0	103,593	18.5	455,125	81.5	100.0	139,811	30.7	315,315	69.3
2019	3.31	1.77	586,149	100.0	109,504	18.7	476,645	81.3	100.0	152,792	32.1	323,853	67.9
2020	3.31	1.79	609,535	100.0	110,896	18.2	498,639	81.8	100.0	192,828	38.7	305,811	61.3

(注) 2000年以前の値は、農林漁家世帯を除くもの。

総務省統計局「家計調査年報」各年版より著者作成。

#### 4. まとめ

近年の社会の変化を3つご紹介しました。年を重ねると誰しもいつかは働くことが難しくなるでしょう。勤労収入を得ることが難しくなれば、資産を取り崩したりその他の収入を得て生活することとなりますが、収入を得る手段は決して多くありませんし、容易に得られるものでもありません。

長生きをしても家族が近くにいれば援助してくれる可能性もありますが、今は暮らしの個別化が進んでいますし、勤労世帯の手取り所得割合も減少しています。世知辛いようですが、今は自立した家計を生涯自ら営んでいくことが求められていると言えるでしょう。

つみたて投資は、こつこつと毎月定額で投資信託などの金融商品を買付けしていきます。

投資信託もまたさまざまなものがありますが、株式を含み運用するものであれば、投資信託を購入することで新たな付加価値を生み出す資本に直接お金を投じることになります。付加価値を生み出す資本は実収入を生み出します。資産形成を加速し、取り崩し期にも武器となるでしょう。

幸い日本には公的年金制度があります。とはいえ公的年金は必要最低限の生活を補償するものでしかありません。だからこそ年金を味方としつつも、日々の暮らしを自ら描き管理し、自助努力によるつみたて投資を含めた資産形成を行うことが、生涯の自立した家計を実現するためのカギと言えるのではないのでしょうか。

このページを印刷する

カテゴリー FIWA認定会員 投稿コーナー

タグ 【Vol.237】 2022年09月15日発行



2022年9月10日

FIWA理事リレー投稿

## 【Vol.237】FIWA®理事リレー

### 「年金手帳」廃止とマイナンバーカード

寄稿：FIWA®協会理事 石津 史子

ちょうど社会保険労務士事務所の開業と公的年金制度に基礎年金が導入された時期が重なったため、「自分年金作り」を強く意識しながら今日まで歩いてきたように思います。この間、5年ごとに年金財政再計算や再評価に伴う数々の年金制度の改正が行われてきました。時には落胆し、新たに誕生する経過措置にはうんざりしながら、「年金は国民生活の拠り所なんやから、あまり複雑にしないでよ！」と心の中で叫んでいました。



年金と関わって仕事をしてきたので、たくさんの相談も受けてきました。「老後の拠り所」となる年金の受給権を得るには、平成29年8月1日に加入期間が10年に短縮されるまで25年必要でしたから、加入期間探しのために、過去の勤務先を調べたり、結婚歴を尋ねたりしたことが懐かしく思い出されます。

そうそう、「年金の受給権」といえば、当インベストラライフにも寄稿（2004年9月号）しましたが、年金相談の窓口で年金手帳を5冊持ってきて、得意げに13回の転職経験を話してくれた大阪のおっちゃんのことを真っ先に頭に浮かんできます(笑)。彼の年金手帳にはそれぞれ異なる年金記号番号の記載がありましたので、年金記録は1本に繋がっていませんでした。

そのため、1冊持って訪れた先の役所では「年金はもらえない」と言われたのだそうです。その際、係の人から、もし他に年金手帳があれば全部揃えて持ってきてくださいと告げられ、今回の年金相談に至ったとのことでした。「あかんか・・・」一時は諦めかけた年金だったそうですが、彼の5つの厚生年金の加入期間は基礎年金番号に集約されて1本に繋がったおかげで、「年金の受給権」ができて、老齢厚生年金と老齢基礎年金を受け取れるようになりました。「そうか、ほんまよかったわ」、大阪のおっちゃんは満面の笑みでした。

ところで、年金の大切な情報が紐づけされている基礎年金番号を記載した「手帳」が廃止されたこと、ご存知でしたか？年金手帳の廃止は、2020（令和2）年5月に成立した「年金制度の機能強化のための国民年金法等の一部を改正する法律」に「国民年金手帳から基礎年金番号通知書への切替え」が盛り込まれて決まりました。

その1つの理由が「被保険者情報が既にシステムで管理がなされていること及び個人番号の導入によって、手帳という形式で果たす必要性がなくなっている」こと。つまり、マイナンバーカードと「ねんきんネット」の連携により業務の簡素化や効率化が可能となり、年金情報の管理を「手帳」でしなくてよくなったということでしょう。令和4年4月以降に年金制度に加入した人には、「手帳」ではなく「基礎年金番号通知書」が交付されています。「基礎年金番号通知書は、黄色い紙で、クレジットカードなどと同じサイズ（54mm×85mmの長方形）です。

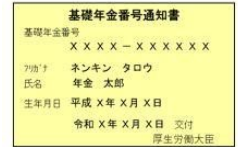
新しい基礎年金番号通知書

日本年金機構「基礎年金番号、年金手帳について」より



ただマイナンバーカードといえば、その交付率は全国的にはまだ半数にも届いていません。

(総務省の「マイナンバーカード交付状況について(令和4年7月末)」によると、全国で45.9%) 個人情報漏洩の報道を見聞きする度に、マイナンバーカードを持つことへの不安は払しょくできないなあと思うのですが、マイナンバーカードはデジタル社会構築のインフラとして欠かせない存在です。特に私の場合は、過去に役所相手の煩わしい手続き業務に多くの時間を費やしてきた苦い経験があるので、無駄な時間やコストを削減できる行政のワンストップサービスを楽しむことは、とてもありがたいことなのです(笑)。



自分の年金情報をマイナンバーカード経由で得るためには、まず、マイナポータルアプリをダウンロードして、「ねんきんネット」に繋げる作業が必要です。

## マイナポータルを使うための3ステップ



### Step 1

ご自身のマイナンバーカードと、登録した利用者証明用電子証明書パスワード(4桁)を用意



### Step 2

パソコン・ICカードリーダーライターもしくはスマートフォンを用意



### Step 3

利用者登録を行う

※一部機能は、ログイン不要で利用できます。

日本年金機構の「年金Q&A」の「マイナポータルからの申込み」を参照しながらマイナポータルと「ねんきんネット」は、意外とスムーズに繋ぐことができました。

利用時のIDやパスワードの入力が面倒で使いにくい印象のあった従来の「ねんきんネット」ですが、マイナポータル経由で1度繋げることができると、2回目からはもっと簡単に自分の年金情報(例:年金記録の確認、年金見込額の確認、年金見込額の試算など)が確認できることもわかり、ニッコリです。

年金以外にもマイナポータルと外部ウェブとつなげて、様々な情報が居ながらにしてとれるし、手続きもできそうです。じっくり時間をかけて付き合っていこうと思います。





「年金手帳」中心に悲喜こもごもの年金相談を受けてきただけに、それが廃止になったというのには隔世の感があります。不便・不自由を感じてきたことが、便利で利用しやすくなることは大歓迎。これからも楽しみです。

このページを印刷する

カテゴリー

FIWA理事リレー投稿

タグ

【Vol.237】 2022年09月15日発行



📅 2022年9月10日

📺 動画紹介

## 【Vol.237】FIWA動画紹介

岡本 和久 CFA, FIW

三和・岡本日本株価指数紹介ビデオ 144年の株価チャートから学べる四つのこと

### INDEX

- 00:00 なぜこの指数をつくりたいと思ったのか
- 04:16 産学協同プロジェクトがスタート
- 07:49 144年間の指数がどう役立つか
- 09:29 生活者に役立つ四つの気づき 1
- 11:33 生活者に役立つ四つの気づき 2
- 13:02 生活者に役立つ四つの気づき 3
- 15:48 生活者に役立つ四つの気づき 4
- 18:36 まとめ

岡本和久のお金と心チャンネル「三和・岡本日本株価指数紹介ビデオ」



このページを印刷する

カテゴリー

動画紹介

タグ

【Vol.237】 2022年09月15日発行

# 生き延びる力～戦中・戦後の体験談を聞く（後編）

岡本 和久

先月に続き、戦中・戦後の体験談を伺いました。痛感するのは、いかにわれわれがいる現在の環境が恵まれているかということです。このありがたい状況で、いかに「生き延びる力」を磨くのかというのは大きな課題です。せめて、あらゆることにチャレンジしていく気持ちを持ち続けることが大切だと思います。最後に島田知保さんと対談をさせていただきました。

## 鳥山百代さん

現在、83歳の鳥山さんは京城生れです。今はお孫さんたちに囲まれ、相変わらず活発に活動されています。しかし、まったく普通の「女の子」が体験した戦中と戦後は想像を絶するものでした。

## 初めて見る日本は緑がきれいだった

私は1928年(昭和3年)に京城、現在の京城(ソウル)で生まれて、今年で83歳になります。父は広島安芸吉田の農家の四男で、新天地を求めて韓国に行き、製麺業を始めました。当時、韓国は日本でしたからね。母は17歳で広島から京城へ行き、8歳年上の父と結婚したそうです。仕事が軌道に乗るまでは二人ともずいぶん必死に働いたようです。京城にあった三越にも麺を卸していたと聞いています。

私が終戦を迎えたのは17歳でしたが、それまでは実に満ち足りた生活を送っていました。百(もも)お嬢様と呼ばれて、使用人もたくさんいました。私が通った小学校は日本人だけで、明洞(ミョンドン)に近い南山という所にある学校でした。韓国の人たちともごく普通に

付き合っていたと記憶しています。もちろん、日本人は支配する側でしたから、肉体労働などはせず、もっぱら韓国の人がするというようなことはありましたけれどね。

警戒警報や空襲警報が時々鳴ったり、偵察機などが来たりしましたが、実際に爆撃されることはありませんでした。しかし、灯火管制はありましたし、家には細菌戦に備えて防毒マスクなどもありました。

私は五年制の高等女学校に通っていましたが、昭和20年、繰り上げ卒業といって4年生の私も5年生と一緒に卒業させられました。玉音放送のあった8月15日は、進学した女子専門学校の夏休みでしたので家にいたのですが、ラジオの電波の状態が悪く、「以テ万世ノ為ニ太平ヲ開カムト欲ス」というところしか聞こえませんでした。でも、なんとなく「敗けたんじゃないかな」ということはわかりました。

役人や知識人の中には敗戦の前に荷物を日本に送り、ご自身も日本に帰っているという人もいたようです。でも、私たち一般人は報道を信じ、ある意味洗脳されていましたから、呆然とするばかりでした。そうしているうちに韓国の人たちが「マンセー、マンセー」と町で騒ぎだしました。勝利を祝っていたのでしょう。

姉と私は何をされるかわからないというので、家の中に囲われてしまいました。押入れに抜け穴を造ったりしました。流言飛語が飛び交い、みんな警戒していました。外へ出ないので社会の様子はあまりわからなかったのですが、デマもかなりあったと思います。ソ連や満州まではある程度の距離があったので、比較的秩序だったのではないかと思います。



姉が徴用逃れで海軍関係の職場に勤めていました。幸いなことにその関係もあって、引き揚げ列車の切符が意外に早く手に入りました。とにかく住んでいる所が日本ではなくなってしまったので、そこには居られないのです。仏壇とか、神棚、おひな様などを庭で燃やしましたが、人形(ひとがた)のものを燃やすというのは忘れられない記憶ですね。

一人が持って帰れる荷物は手で持てる範囲に限られていました。私は大きなリュックサックを持ちましたが、母は喘息の真ん中の弟をおぶっていたのでリュックを持つことができません。一番下の弟は小学校低学年なので大きな荷物は持てず、本当に大事な物だけを持って帰るだけでした。写真はアルバムから剥がして持ち帰りました。

当時、かなりのおカネを出せば、闇ルートで荷物を運んでくれる「闇船」というのがありました。両親はそれで荷物を送ったのですが、帰国後、ずっと首を長くして待っていましたがとうとう届きませんでした。

帰国するまではやかんと飯盒、お米を持って歩いていました。釜山で20日間ぐらい引揚船を待ちましたが、その間は本当に難民でしたね。満州から逃げてきた軍人さんたちがかなりいたのですが、その人たちは身ひとつで逃げているので荷物がありません。それで頼むと持ってくれたのです。それは本当に助かりました。もちろん食べ物物の差し入れなどはないですから、みんな、自分で食べ物を調達していました。まあ、おカネを出せば買えたということでしょうね。

母はかなり不利な闇ルートで日本円に交換をして、それを日本に持ち帰ろうとしました。おカネを持ち帰る方法については水筒の中に入れるとか、いろいろな話を聞きましたが、誰でも気づく方法はみんなバレてしまいます。船に乗る前に全員が身体検査をされるからです。女性の場合、韓国の女性が身体検査をしました。母は身体検査で見つからないようにするため、段ボールの波の部分の部分を切ってそこにお札を入れ、糊で貼り直してトランクのような形にして持っていました。



幸い見つからずに持ち帰れた何万円かのおカネは、帰国後非常に役立ちました。当時のおカネで家が十分に建つ金額ぐらいありました。まだ戦時中の昭和17～18年ごろでしょうか、5000円を日本に送金してそれで田畑を買っておいたぐらいですから、数万円というのは大変な金額だったのです。

帰国後、その田畑で採れたもので、十分ではないけれど家族8人が芋粥で糊口をしのぐぐらいのことはできました。帰国した年もちょうど9月に帰ったので、現物で小作米が入りましたから、それは助かりました。

興安丸という船で日本に帰ったのですが、船に乗ったときに船員さんが「お帰りなさい、もう大丈夫ですよ」と言ってくれたことが本当

にうれしかったです。安堵感、もう大丈夫だという思い、これは筆舌に尽くしがたいものでしたね。私たちは子どもでしたが、両親はもっとホッとしただろうと思います。一晩で玄界灘を越えて、山口県の仙崎の港に着きました。本当に緑がきれいだなと思ったのを覚えています。緑のなかに柿の実がなっていた。それが印象に残っています。

そして、驚いたのはすげがさに緋(かすり)の着物で日本人女性が肉体労働をしている姿を見たことでした。それまでは肉体労働をするのは韓国の人で、日本人が働くのを見たことがなかったのです。「日本人がこんなに働いている」ということが驚きだったというのは、今から考えると恐ろしいことでもありますね。それから、日本にはどんな山間部に行っても立派な小学校がある、韓国では当時、小学校は義務教育はなかったと思いますので、日本での教育の普及ぶりがよくわかりました。

仙崎から下関まで貨物列車で移動、山陽本線で広島まで来ました。印象深かったのは徳山の海軍工廠が全滅していたことでした。そして、被爆後の広島に到着しましたが、そこは焼け野原。何にもない。福屋というデパートの残骸が見えるだけでした。放射能が出ているかもしれないといううわさがあり、汽車に乗っているときは絶対に外に出てはだめだと言われました。

広島を少し先の祖母の家で一泊しました。そのときに着物を脱いで、五右衛門風呂で着物を煮沸したのを覚えています。シラミを除去したのです。シラミがいっぱい体についていたのです。そのときに裏の山で大きな次郎柿がなっていました。なぜかはわかりませんが、娘心に日本中どこにいても柿があるというのが印象的だったようです。韓国では街中に住んでいましたからね。

韓国では親戚がほとんどいませんでしたから、日本に帰ってきて、親戚の子とはすぐに仲良くなりました。祖母が「やっぱり血のつながったものなのだろう」と言ったのも記憶に残っています。

最終的には父母のふるさとの吉田に着きました。父の兄が大八車を引っ張って迎えに来てくれ、「これからは荷物を背負わないでいい」と言われたのがとてもうれしかったです。それで祖母の本家の一部屋でお世話になることになりました。四畳半一間、そこに8人が寝起きしていました。隠居所でしたがお勝手などちゃんと独立して生活ができるようになっていました。冬はあんなに足をつっ込んで、みんなが放射線状になって寝ていました。

父は京城にいるときから呆然状態でした。すべてを失ってしまったのですから無理ありません。でも、先ほどお話したように、米だけは買っておいだ田畑で収穫がありました。しかし、牛を持っていません。肩身が狭いというか、牛を借りたら、何日分の労働力で返さなければならないのです。田植えは共同作業です。そのなかで牛を持っていないということではかにされる。だんだん、厄介者を抱え込んだということで祖母の立場が苦しくなる。気の毒だということで、姉は大津の東洋レーヨンに職を見つけて出ていきました。

私は広島女専への転校試験を受けて合格をしていました。しかし、親から「男の子が3人いるから、悪いけど女のあなたは進学をあきらめてくれ」と言われました。母は泣いて頼むのです。「それならどうして転校試験を受けさせたのだ」と思ったものです。一週間ぐらい泣きあかして、そして進学をあきらめました。

長男は学費のいらない師範学校に行き、卒業してから東京の江戸川区の学校の先生になりました。そのまま田舎にいても将来性がないですから、それを機に田畑を売ってみんなで東京に出てきました。それで家族全員で働き、下の弟は奨学金をもらって何とか家計が安定してきました。父母は子ども相手のお菓子屋を営みながら、つぼ焼き芋を売ったりして生活を支援していました。貧しいなかでも借金などはなく、質屋にもいかなかった。進学をあきらめた私は、健康保険組合で経理の仕事をしていました。みんな、とにかく必死に働きました。

今、私が一番感じるのは、教育の恐ろしさということです。私たちも言われるままに政府のいうことを信じていた。みんな、何の疑問もなく戦争の勝利を信じていた。良い面でも悪い面でも教育の力はすごいものがあります。総理大臣にははっきりしてもらいたいですね(笑)。若い人には大所高所から世の中を見るような目を養ってほしい。そして、判断力のある人間になってほしいと思います。

私も娘たちを判断力のある人間になってもらいたいと思って育ててきました。私の子育ての基本でしたね。善悪、右にいくか、左にいくか、自分がどのような行動をしたらよいかというときに、判断する力を持ってもらいたいと思っていました。そのために学校にも行ってほしいし、経験も積んでほしい。私も子どもに的確なアドバイスができるような親になりたいといつも思っていました。成績がどうかとかいうことよりも、正しい判断ができるということの方がはるかに重要です。ひたすらそれを願っていました。

今の日本の教育は少し甘すぎるのではないのでしょうか。会津藩の「什(じゅう)の掟」に「ならぬことはならぬものです」という教えがありますが、駄目なものは駄目という教育が必要だと思います。若い人には「希望」を持ってほしい。私たちは何もなかったけれど無我夢中で働いてきた。そしていつもネガティブにならず、将来に夢を持って生きてきました。戦後のものすごいインフレのなかでも、とにかく希望を持ち続けてきた。おカネよりもモノの時代でした。だから今でもモノを捨てられない(笑)。給料がいくら上がっても追いつかない。おカネよりもお米のほうがありがたかった。そんな時代があったのです。でも、将来が明るかったですね。

今は豊かになりすぎたのかもしれませんが。一方で希望がなくなってきた。私が戦後、一番欲しかった物がミシンでした。それを得たときの喜びは忘れられません。今は満ち足りていてそのような喜びがなくなっているのかもしれませんがね。まあ、急に貧乏になれといっても難しいですけどね。

東日本大震災のとき、日本中の人たちが何とか自分も役に立ちたいと思ったでしょう。あの一瞬の気持ちを忘れないことです。モノは豊かになっても、心の豊かさはまだまだです。これからは心の豊かさに将来の明るさを求めていくべきだろうと思いますね。戦後、引揚者たちは一瞬にしてすべてを失いました。神戸の震災も、昨年の震災も多くの人があつという間に多くのものをなくしてしまいました。でも、何が起っても身につけた腕や知識はなくなりません。ですから、若い人にはしっかりそのような生き延びるための力をつけておいて欲しいですね。



## 宮崎一幸さん

経済ジャーナリスト、インテリジェンス・ユー代表

東洋経済新報社に長く勤められた宮崎さんに、今回は母上の手記を提供していただき、また貴重なお話も伺わせていただきました。

私の父は島原の農家の出身でした。当時は5男坊、6男坊には相続する畑もなく、結局満州に行ったのだと思います。満州といっても近いのですからね。東京に行くよりも、もっと簡単に行けました。父は、満州の学校で土木工学を学んだようでした。母は親戚の関係で満州に行き、父とは満州での見合い結婚だったようです。

私は昭和16年(1941年)2月に哈爾濱(ハルピン)で生まれ、5歳まで暮らしました。父は黒竜江の大きな仕事にかかわり、その支部長になっていました。当時は家と役所が一緒のようなもので、土地も3000坪ぐらいありました。

7月になると、もう秋の訪れで庭中にコスモスが咲く。そこに馬車で冬のオンドル用の材木を一日中運び込んでいた。そこで姉と砂遊びをしていたことを覚えています。満州人の使用人やロシア人のコックさんまでいました。

もうひとつ覚えているのは、のべつ宴会をしていたこと。料理屋などそんなにはないですからね。うちには50人前ぐらいのお膳がありました。関東軍の人は宴会をするところがないので、うちに来ていたような感じでした。軍人さんは甘いものなどたくさん持っていた。ですから羊羹をくれたり、あめをくれたり、当時は珍しかったチョコレートももらったりしました。よく覚えていますよ。芸者さんもしょっちゅう家に来て、どんちゃん騒ぎをしていました。



宮崎一幸さんの母上、宮崎静江さんの手記より(以下、囲みはすべて)

北満の果て、国境の町、黒河(コッカ、現在・中国黒龍江省愛輝、アイホイ)。私達一家はこの静かな町に、二年余り住みついた。広大な黒竜江の対岸はロシアのブラゴエ(ブラゴベシチエンスク)で、時折小さな人影がみえる。ロシア牽制のためか黒河のネオンはいつも灯っている。七月末には一家揃って黒竜江の花火見物と酒落こんだ。昭和二十年八月十二日、冬物の整理もすんで、やれやれと一息ついて庭に目をやると東菊が咲き始めていた。掃除も念を入れて、明日あたり長崎のおばあちゃんを奉天まで見送りに行った夫も帰って来ると思い、部屋に東菊を活けておいた。「組長さん、集合してください。」との声に表に出る。

ロシアとの戦いが始まったので、屋までに冬物衣料と食料を持って学校に集合との事。さあ大変だ。持てる物だけでも何とかまとめ、夫が帰ってきてもすぐ送れるようにと、汗だくで片付ける。ご飯を炊かなくては、と思いながら外を見るともうぞろぞろと皆道を歩いて行く。「急がなくては」、と朝のご飯を握り、寒いときの用心に毛糸ものをいっぱい詰めて、一幸にも幸子にも持たせる。大切なものは一つにまとめ、着られるだけ(五・六枚)服を着込んで洋を背に二人の手を引いて、家の戸締りをしっかりして学校へ急いだ。



のどかで豊かな生活が、突然、一転しました。終戦になる前にソビエト軍が攻め込んで来たのです。攻めてくる前の晩、「どうもおかしい」というわきが立ちました。「逃げなければいけない」と話している前日、関東軍の人たちは「転勤になりました」と言ってみんな先に逃げてしまった。関東軍が使ってしまったので列車も自動車もないので、持っている荷物を馬車に乗せ、私たちも逃げ始めたのです。守ってくれるべき関東軍はいないのにソビエト軍は攻めてくる。仕方がないので父たちは民間人だけで手元の銃を集めて、山にこもったのです。母の言葉によれば「死に行くのだと思うより、まるで出張を送り出すような気分でサヨナラをした」と言っていました。

山にこもった父たちは、夜が明けたら周りをソビエトのタンクに取り囲まれていた。タンクと戦く方法など誰も知らない。一発も打たずに降伏したそうです。それでシベリアに連れて行かれてしまった。関東軍で逃げ遅れて捕まった人たちと一緒にされてしまったのです。国際法上は捕虜を労働には使ってはいけないのですが、関東軍司令部はそれを認めてしまった。数十万人です。シベリアは何もない。攻めてくるソビエト兵も多くは囚人兵でした。父などは土木技師でしたから、本来はシベリアで長期間働かせられる可能性が十分あった。しかし、みんな、それを黙ってしてくれたので3年ぐらいで帰してもらえたそうです。

でも、その間が大変だった。隣で寝ている人が死ぬのがわかる。亡くなる前の晩にシラミが一斉にいなくなるのだそうです。体温が下がるのです。食べ物といっても黒パン一個ぐらいです。栄養失調になってポーッとしている。元気な人は弱っている人のパンを取ってしまう。取られた人は自分が食べたと思ってしまう。それぐらい意識がもうろうとしている。そして、そういう人は死んでいく。全体の3割ぐらいが亡くなられたと聞きました。零下40度か50度の土地ですからね。だから本当に便所のなかに落ちていたジャガイモの切れ端でも何でも食べたと言っていました。

モンゴル方面とシベリア方面の両方から攻められていた。開拓農民の方がたくさんいて、それは本当に悲劇でしたね。開拓農民の方は子どもが多い。「産めよ、増やせよ」で、子どもは労働力ですからね。

石の轍の馬車でゴトゴトと大草原を逃げました。秋ですから見渡す限り桔梗が咲いていました。そこに飛行機が来て銃撃をする。その間は草の中にもぐって隠れる。私は子どもで小さかったので、桔梗が人間の背の高さぐらいに感じられた。轍が桔梗の紫色に染まっていた。敵機が去るとまた馬車で移動する。ずっと後年まで桔梗の夢を見ましたね。そのあと無蓋貨車に乗って逃げました。そうすると敵は銃撃に来るんですね。私の前にいたお母さんが赤ちゃんを抱いておっぱいをあげていた。その人が銃撃でやられて血が私にバサツとかけた。すごかったですね。これもいつまでも夢に見ました。

「水が欲しい」と子ども達にせがまれても一滴の水も無い。まわらぬ口で洋がブーブーするので唾でも飲ませてやろうとするが、いくら努力しても口の中はカラカラで喉が引きつるだけ。隣の人の水筒にはまだ水が入っているだろうか？こんな時には「下さい」とも言えない、人の事より自分が大切なものだ。男の人がいてくれたらなあと思う。子どもが泣き、その体に巻き付けておいた着物も邪魔になり一枚一枚脱ぎ捨てた。腕に付けていた時計も取ってしまう。

何だか頭がボーとしてきた。思ってもいない事が口から出る。それがおかしくて笑う。他人が見たらまるで気遣いだ。私の血筋には気遣いの人はいない、などと考えるくらいだから気がおかしくなっていないと思うのだが。なんだか頭のゼンマイが切れてしまったようだ。こんな事が二日も続いたら本当に気が狂ってしまうかもしれない。

「さあ、降りるんだ」という声にハツとして目を開いた。どうしたことか何も見えない。真っ暗だ。「奥さん！私の肩につかまちなさい」と誰かに声を掛けられて、ようやく汽車から降りた。まるで高い船の上から飛び降りたような感覚だった。皆夜の線路上にへなへたと崩れ落ちる。もう歩けない。何しろ水が欲しい。まわりをキョロキョロしていると、これが本当に天の助けというのだろう。雨が降ってきた。大きな口を空に向けて、思い切り雨水を飲む。ようやく元の私に戻れた思いがした。喉が潤うと、皆起き上がって駅に向かった。まだ目元が少し引きつっている。

要するに、玉音放送も何もない。もう敗けたのはわかっていた。父は自分たちを守るために山にこもったままいなくなってしまった。シベリアに連れて行かれたのですが、そんなことは残った家族にはわからない。死んだものか、あるいはシベリアか、そんなことはわからない。残された大人は女と年寄りばかりです。とにかく哈爾濱まで戻るのは大変だったのです。

やっと汽車に乗れたが、子ども達は網棚に乗せ、四人掛けの椅子に六人座り、間には二人が立ってどうにも身動きが取れない。汽車の中で隣の赤ちゃんが死んでいった。奥さんが大声で泣きわめく。同情しなければならぬと思いつつ、無性に腹が立った。悲しいのは彼女だけではない、と口まででかかったが、ぐっと押さえた。家の洋も明日か明後日の命。洋はハシカにかかっていた。私はその時が来てもあんな様はしたくない、と心に言い聞かせた。

吟爾濱に早く着かないかと待っていたが、夜がきて空が明るくなってもまだ到着しなかった。死んでしまった赤ちゃんをおぶっていた人も、川の上から赤ちゃんを捨てた。ドボン、ドボンといくつもの音がする。捨てる人の顔も死人と同じ色だ。

哈爾濱に戻りましたが、元の日本人街を満州人が襲って来る。彼らは貧乏ですからね。それで何から何まで持って行ってしまふ。身ぐるみはがれます。量から何からすべて持って行ってしまふのです。電気も来ていないのに電球まで持って行った。私は木でできたタンクのおもちゃを持っていたのですが、それを取られそうになってギャーギャー泣きました。そのせいか、そのおもちゃだけは取られずにすんだのを覚えています。

ソビエト兵がマンドリンの形をした拳銃を撃って中国人を追い払う。そのソビエト兵の腕を見ると、いくつもズラッと巻き上げた腕時計をしている。しかもその時計の時間がみんな違う。彼らは時計が読めないのです。母は女性だとわかると危ないので、頭を丸坊主にして顔に墨を塗っていました。満州人の服を着て男のような格好をしていました。

いよいよ八月十五日。天皇のラジオ放送を聞く。泣く人もいたが、私は泣けなかった。負けるという事はうすうす感じていた。負けたのだ。仕様が無い。泣く気力も無いのかもしれない。明日がどうなる事か、考えも付かない。

玉子でも茹でて食べようかと勝手口から外をのぞくと、幾十人もの満人がワイワイ言いながら品物を持ち出している。何が始まったのだろうかと思っている間に、こちらにもやって来る。ワーワーと叫びながら箆筒、戸棚、雨戸までありとあらゆる物が、大水に流されたように無くなった。恐ろしくて押入れに入り中から戸をしっかりと握っていた。青龍刀を持った者、鎌を振り上げる者、黒く脂ぎっていて、映画に出てくるそのままの顔をしてわめいている。今までの怨みを晴らそうと何から何まで片端から持って行ってしまふ。暴動とはこういうものなのだろう。何も無くなってしまった。

ついには私達も引っぱり出される。Mさんが裸にされ、女はシミーズ一枚にされる。一幸にも手が伸びた。外を見るとロシアの兵隊が銃を構えて立っていた。「助けて」と大声をあげてロシア兵の後ろに隠れた。訳の分からぬ大声に満人たちはビクビクして、蜘蛛の子を散らすように逃げていった。その隙に私達も逃げた。

中国の、特に北満の人は文盲が多かったのです。日本人はほとんどが字を読める。彼らは、明らかに日本人は自分たちとは資質が違うと思ったのでしょう。それで、日本人の子どもをくれて言うてくる。しかし、男は仇討などする恐れがある。女の子は頭がよく、労働力になり言うことを聞く。小学校1年ぐらいの子がずいぶん中国人にもらわれていきました。それが中国残留孤児になったわけです。よく子どもを捨ててきたというような言いかたをされますが、実は、そのままいけばみんな死ぬと思っていた。そこに中国人が来てまんじゅう20個で子どもをくれという。中国人にあげた子どもは確実に生き延びられる。そして、まんじゅう20個で残った子どもたちが飢えずにすむ。だから名札を着物に縫い付けたりして中国人に子どもをあげた。だからこそ、戦後、「実は私が親です」と言って手を挙げづらくなってしまったのです。本当に壮絶ですよ。

二～三百人の満人がやって来て私達を一箇所に集め、ぐるりと周りを取り囲み、持っている物を出せと脅迫する。娘をくれと、手を引っ張る。取られたら大変！向こうとこっちで互いに手を引っ張り合う。娘が大声で泣き叫ぶ。泣いたので助かった。まったく日本人もこうなると哀れなものだ。

一人去り、二人去りして、夕方になってようやく家に入れた。中支那北安は昔、共産匪が農民になった所なので何をするか分からない。支部の会議室に女子どもを真ん中に、男の人達が周りを囲む。「ピストルが五丁有るので、いざという時は覚悟してください」と言われる。「私もお願いします」と頼んだ。

終戦二日後の8月17日、北安の学校に收容されました。ひとつの教室に60～70人が詰め込まれ、頭と足を互い違いにして寝る状態でした。夜中にトイレに行くと、もう入る場所がない。夜もロシアの兵隊が女を探しにきます。明るくなると今度は時計をあさりに来る。3000人の共同生活でした。学校の校庭では、満人が昨日、略奪したものを市に出して売っている。

八月の暑さに身動きが出来ない生活で毎日病人が出る。はしかがはやり始め、2～3歳の子どもが櫛の歯が欠けるようにバタバタと死んでいく。病院の先生はいても薬は無い。長い二ヶ月だった。

何しろ便所に行くにも男の人の監視がないと安心して行けない。長い穴の上にコモがまいてあるだけの便所に二十人もの人が前の人のお尻を見ながら用を足す。一部が済むと「ハイ」と監視の手が拳がり、後の人がサッと跳んでくる。連れて行かれては大変なので、兵隊が来る前に用を足さなくてはならない。女の人は顔をわざと黒い泥を塗り付けて、お互いに見られた様ではない。それでも、黒いクーリーの服を着、真っ黒い顔をしていてもやはり自分は女だと思っているらしい。

小便の臭いなどで息が切れそうな汽車に詰め込まれ、哈爾濱を通り、2年前まで住んでいた新京にたどり着きました。平和な毎日を過ごした新京は、どこも暴動にやられ荒れ果てていました。そこで弟が亡くなりました。

家がロシア人に乱入されたので抱いて逃げているうちに、気が付くと洋が冷たくなっていた。この子は手が掛からない子で、2時間でも遊んでいた。こんな事になるのなら、昨年哈爾濱まで行って痛い思いをするトラフオームの手術などしてやるのではなかった。かわいそうに思う一方、親孝行の為に死んでくれたのかとも思った。小さい子ども3人を連れていた私はさすがに疲れていたからだ。近所の坊さん呼び、児玉公園の生前仲のよかったMさんの子どものお墓の隣に埋めた。辺りは日本人の墓標でビッチリ、何千人埋めてあることか。

翌日、花を持ってお墓参りに行って驚いた。「犬と日本人、入るべからず！」と大書してあり、すっかりローラーで地ならししてあった。戦に負けた者の悔しさが胸に込み上げてくる。可愛そうな洋、きりも無く湧き出る涙をどうすることも出来なかった。



とにかく葫蘆島(コロトウ)の收容所までたどり着き、そこから博多まで逃げてきました。私は哈爾濱に戻ったところから本当に何も覚えていないのです。記憶がなぜか欠落している。次に記憶に残っているのが引揚船でした。上陸前に赤痢が発生して20日間、船に足止めを食わされました。いよいよ明日、上陸というので最後のお米を炊こうと置いておいた。そうしたらそれを盗まれてしまった。そんなこともありました。

上陸すると頭からDDTを浴びせかけられた。そして、自分の顔ぐらいあるお赤飯のおにぎりがもらえた。母は子どもが食べ残すのを期待していたのですが、みんな食べてしまった。

島原の父の実家に2～3カ月いて、その後、母の姉のいた千葉の大原、房総半島の先っぽですね、そこに転がり込んだのです。私もそこで小学校1年に入りました。大原は米も取れる。地味がそれほどよくないけれど野菜もできる。そして、魚は豊富です。ですから、ひもじい思いはなかったですね。その子どもたちはみんな太っているのに、こっちはガリガリ。よくいじめられましたよ。母は私たちをそこに預けて豊橋に就職していました。縫い物の仕事でした。その後、父がムーンフェースの真ん丸な顔になって帰ってきました。それであまり父には向いているとは思えない食料品屋を大宮で始めました。頑固な商売をしていましたね(笑)。貧乏でしたが食べ物には苦勞しませんでした。

まあ、極限状態を体験したことで「どうせ一回は死んでるわ」という気持ちはありますね。それとね、ドリス・デイが歌っていた「ケ・セラ・セラ」の気持ちですね。あ、それから、1929年のミュージカル、「回轉木馬」のなかに「You never walk alone(君は決して一人で歩かない)」という歌があります。エルビス・プレスリーも歌っています。

嵐の中を歩くときもあなたは一人ではない  
嵐の向こうには輝く大空がありひばりの歌声が聞こえる  
だから顎を引き締めて真正面から向かって行け

というような歌です。酔っぱらうとよく歌いながら家に帰ります。この歌の歌詞も好きですね。

若い人へのメッセージ？ そう、今の人はあきらめるのが早いんですね。人間、極限状態になると「できない」と思っていたことが「できる」方にスイッチが入ります。卑近な例でいえば、いくら練習してもできなかった鉄棒の逆上がり必死に練習しているとできるようになり、あとはずっとできるようになる。もうだめだと思ったところでようやく能力のスイッチが入る。ですから、あきらめるのが早いといつまでたっても本来の力が出てこない。

ちょっと優秀な子には、「お前ら、そんなにエリートじゃないよ」と言いたいですね。世界のエリートはもっとすごい。格差社会というのは自分たちが作っているのです。偏差値が低いとそれだけで自分をダメだと思ってしまう。あきらめてしまう。逆に偏差値が高いからといって、そのことだけで優秀だともいえない。勝手に自分たちがそう思って、自分たちで格差を作っている。その格差によって自分の成果が裏切られると思うとガクッとくるんですね。格差を作るのに加担するなと言いたいですね。

## 後記にかえて対談: 島田知保さんx岡本和久

岡本 | 8月は終戦記念日です。戦中・戦後を生きぬいた方々も数が減っています。極限的な状況を体験した方々の体験は、ある意味われわれの持っている貴重な資産です。その体験が風化しないように、消えてなくならないように文章の形にしておくことも意義があると思い、2回に分けて特集を組むことにしました。もちろん、とてもありがたいことなのですが、われわれはあまりに長く平和で安楽な生活が続いてきたために、それを普通だと思ってしまうようになってしまった。そして、「苦しい」とか、「大変だ」という基準がすごく低くなってしまい、ちょっとしたことで「もうダメだ」と思うようになってしまった。そんな気がするんですが。

### 「国」と「国防」を考える

島田 | 確かにそんな気はしますね。

岡本 | 私は1946年、終戦の翌年に生まれました。先月号で紹介した父の手記にもあったように、私の生家の台所の床には大きく焼け焦げた跡があったのを覚えています。また、家に砲弾や鉄兜があり、近所の東京工業大学には防空壕がたくさん残っていました。庭に掘った防空壕は小さな池になっていました。もちろん貧しかったし、粗末な服で学校に通い、決しておいしいとはいえない脱脂粉乳とコッペパンの給食で育ちました。しかし、まあ、そこを原点としてみればずっと平和が続いて経済が発展し、成熟し、それなりに豊かな国ができました。

しかし、一方で国防面での安全などは極めて意識が薄くなってしまっている。みんな、生活の安全・安心にはとても敏感なのにね。国防はアメリカ任せのようになってしまった。一方のアメリカは戦後もずっとどこかで紛争に巻き込まれている。60年代の中ごろ、私がアメリカの大学に行ったころは本当にベトナム戦争が激化しつつあるときでした。しかも、国民皆兵制です。ルームメイトが18歳の誕生日に徴兵局に登録に行ったのをよく覚えています。成績の悪い順にベトナムに飛ばされるというふうなうわさがまことしやかに流れていました。徴兵制はなくなっても、アメリカはずっと戦争と隣り合わせの暮らしをしていたんです。しかし、日本にはこれが完全に抜け落ちている気がします。決して、戦争がよいと言っているわけではないですが、緊張感というか、危機感は絶対に必要です。

島田 | 国防に対する考え方はいろいろあると思います。でも、われわれの生活は決して戦争とかかわりがないのではなかった。ずっと米軍基地はあったわけですね。私の大学は外国人も多かったし、そのなかには基地の人たちもたくさんいました。でも、正直言うとやはり彼らが持ち込む習慣というか、行動は受け入れられないものも多かった。ドラッグとか、人身売買とかですね。韓国は徴兵制がありますが、やはり、家族や友達と隔離されて人間性を捨てる訓練を受けるというのは人道的にもよくないと思います。



- 岡本 | 確かに戦争することは決してよいことではありません。でも、われわれ、自立が大切といっている最後の最後にはやはり国の保護の下に入っている。日本国のパスポートがあるから世界中、ほとんどの国に自由に行けるのです。もし、パスポートがなく海外に放り出されれば、その人がどうなっても誰も守ってくれない。その一番基本的な生存を確保する部分で、国というのはまだ現在の世界では重要なのです。ですから、国というものが消滅するという事の恐ろしさをわれわれは忘れていると思うんです。玉音放送のあと、「もう、日本はなくなったのよ」とお母さんが子どもたちに告げる上田卓さんのお話がありましたが、これは本当に胸にグサッと突き刺さる言葉でしたね。
- 島田 | 国の存在はものすごく大きな保障ですよ。今は、国が守ってくれていることが当たり前のようになっている。もともと国境は人間が引いた境界で、時代によって変化するもの。どんな国もいつかは消えてなくなる。戦争で国を守るにしろ、非暴力で国を守るにしろ、相当の覚悟が必要です。スポーツのときとか、不満のはけ口としては、国が意識にのぼってくるけれど、国を守るために自分がどうするかということはほとんどの人は考えていない。
- 岡本 | 国が守ってくれるのが当然と思うのと同じように、平和も当然という前提でわれわれの生活が成り立っています。本当は平和ではなくても、平和を直視しない状態といったほうがいいかもしれませんけれどね。
- 島田 | 自分たちで自分たちの国を守るという、意志のある国とない国では社会の組み立てからがかなり違ってくるように思います。国を守るという意志を浸透させる際に、ボトムアップか、トップダウンかという違いがあると思いますが、私は今の日本では、やはり国民一人ずつの意識を高めるボトムアップ方式の方がいいのではないかと考えています。個人がしっかりしてくることで国という器もしっかりしてくるのかなと思うんです。
- 今回、記事を読んでいて、実は現在の状態は戦後と似た部分があるのではないかなと感じました。東日本大震災後の日本と戦後の日本。戦後の日本には焼け野原から立ち上がろうという、ある意味希望があった。でも今は、みんなちょっと疑心暗鬼になっている。国も方向性を示せないでいる。そのようななかでみんながつながってきているという面もあると思うんですよ。

## 「戦後」と「3.11後」の違い

- 岡本 | 3.11と戦後の違いで一番大きいのは、戦後のときは今後の方向性を示してくれる、というか押し付けてくれる存在があったということでしょう。アメリカというね。「これからはこういう風にやらなければいけないだよ」と針路を教えてください。功罪ともにあるとは思いますが道筋をつけられた。3.11ではそれが無い。
- 島田 | ビジョンが見えない。本当はわれわれ個人がビジョンを示さなければいけないんですけどね。誰かがグランド・デザインを描いてくれるのを、口を開けて待っている。
- 岡本 | なぜ、そうなっているかというやはり戦後のグランド・デザインも人に描いてもらったものだからでしょう。与えられることに国民が慣れてしまっている。
- 島田 | かなりいろいろとキーワードは出てきています。持続可能な社会とか、地球規模での共存とか。それらのキーワードが経済や国家、あるいはわれわれの腑抜けた楽観主義のなかでうまくかみ合っていないことがあります。
- 岡本 | 「そんなのきれいごとだよ」とか「現実の社会ではそんなのうまいかない」という既成観念で打ち消されてしまう。国家レベルでも、企業レベルでも、個人レベルでもキーワードが単なる概念で終わってしまっている。エクセキューションがないんですよ。政府が悪いのかといえばそれまでですが、でも、その政府を選んでいるのは国民ですからね。
- 島田 | 何かあるとみんな政局になってしまう。虚しいですよ。
- 岡本 | 希望が持てるのは、東北の悲惨な状態のなかから戦後を生きぬいたような力を持った強い人たちが出てくることだろうと思います。将来の日本のリーダーとなる人が、今回被災された若い方からたくさん出てくるでしょう。それを期待したいですね。

島田 | 戦中・戦後の厳しい状態のなか、歯を食いしばって生きてきた人たちがいて、その結果私たちが今こういう暮らしができています。安心な暮らしを謳歌するばかりでこのときに何もしなければ、前の世代の遺産を食いつぶすだけです。少し長い歴史感を持って自分たちの今を見てみると、これからの生き方や経済の見方なども変わってくるかもしれない。若い人にはぜひ、それをやって欲しいですね。

岡本 | 難しいのは、苦難が強い人間を生み出すとしても、今のこの豊かな日本が現実にあるわけで、急に「貧乏になれ」と言われても無理な話です。それではどうしたらいいのか、それが今回いろいろな方を取材して常に頭から離れなかった疑問でした。それで思うのですが、今、円高が進んでいるのは、ある意味日本の産業のグローバル化の遅れが引き起こしている面があります。もっと多くの企業が海外生産を増やし、生産拠点を新興国や発展途上国に移せば円高は止まるでしょう。でも、当然の結果として国内に雇用機会が減り、仕事を求めて遅れた国に出ていく人も増えます。その人たちは戦後の日本ほどではないでしょうが、やはり、貧しい生活がどんなものか、そのなかでどうしたら生き延びていけるのかということを読んでいくでしょう。これもひとつ経済の神様が与えてくれている試練なのかな、などとも思います。

## 「過保護」が「生き延びる力」を奪う

島田 | 80年代、90年代にはまだ若い人たちがそういうところに行こうとしていたんですね。その非日常的な生活がひとつのエンターテインメントだったということはあっても、彼らが今、NGOやNPOで活躍しているという事実もあります。わざわざ外国なんか行きたくないということを知ると、ちょっと大丈夫かなと心配になりますよね。

岡本 | 私は70年代の初めにブラジルのサンパウロで勤務したことがあります。当時のブラジルは今と違ってまさに発展途上国でした。バスに乗ればノミ・シラミがつく。町にはスリ・かっぱらいがいつも狙っている。私が駐在した2年間、わが家には電話がありませんでした。ブラジルの高層ビル35階にオフィスがありましたが、そのビルが火事になったことがあります。屋上に避難して消火を待ったのですが、あとで考えると危なかった。ちょうど、「タワーリング・インフェルノ」という映画が上映されているところでした。まあ、かなりの低開発国での生活でしたが、ブラジルで生活した経験は本当に人生で役にたっています。

島田 | 私も80年代、バックパックで世界のさまざまな場所に行ったのは貴重な経験でした。モノがなくても人間は生活ができるとか、日本が安全の代償で何を失っているとか、いろいろな発見がありました。安全ではないところでも人間は生きているんですよ。

岡本 | そう、安全じゃないから生き延びる力が出てくる。

島田 | 日本はあまりに過保護ですよ。電車降りるときに忘れ物の心配までしてくれる(笑)。

岡本 | ホームでは電車が来るので黄色い線の内側に下がれとか……(笑)。

島田 | アメリカのグランドキャニオンでは、一目見て落ちれば死ぬとわかるところには柵がない。そういう意味では二重、三重に安全網をめぐるしてくれることで自分の頭を使わない、自分の危機に対する感覚を使わないということになっている。

岡本 | 動物的な生命力というか、サバイバル力がひ弱になっていますよね。

島田 | もう一つは教育の問題です。学芸会で主人公のお姫様が5人も6人もいるというおかしな現象がありますね。徒競走で全員が一着とか。本当は社会のなかで自分の能力を相対化して考えることを止めてしまっているのです。みんな気位は高いけれど謙虚さが無い。

岡本 | 規格大量生産は工業製品だけでなく、子どももそうです。ですから、ちょっと人と違うと、欠陥品としていじめの対象になる。昔、足の遅い子は「くやしかったら勉強でこい」などうそぶいていた。そんなしづとさが欲しい。



- 島田 | ファッション雑誌で同じものを売りつけようとしているのに、キャッチフレーズが「わたし流」だったり「自分流」だったりする。これ自己矛盾ですよ。ある意味、消費文化に絡め捕られた箱庭のような文化になっている。だから、30~40代になって突然、仕事を辞めて「自分探しの旅」に出たりする。「自分」は仕事をするなかで探していくものです。
- 岡本 | 本当にそうです。どこかの場所に「自分」が落ちているのではない。自分のなかにしか自分はいないんだから。角界に「欲しいものは全部、土俵に埋まっている」という言葉があるそうですが、欲しいもの、自分も全部、仕事という土俵に埋まっている。必死にそれを掘り出せばいいんです。
- 島田 | もうひとつ顕著なのが資格収集ですね。いろんな資格を取って安心したり、成功した人の書いた本を読んでそれを真似ようとしてたり……。
- 岡本 | 3時間でわかるナントカみたいな(笑)。
- 島田 | そんなことで成功できるならみんな成功していますよ。解答がないのが人生です。でも、何かを習おう、教えてもらおうとする。
- 岡本 | 学ぶのはよいことだけど、近道、早道、楽な道を教えてもらいたがる。長期投資でのんびりやっていたらいいのに、みんなすぐに儲かる短期投資の方法を知りたがる。何かうまい方法があるはずだと思っている。
- 島田 | あるいは貯金しているから大丈夫という人や、将来の生活を考えるのが不安だから考えないという人もいる。でも、比較的豊かだとか、日本が安全だとかいう状態はあまり長くは続かないかもしれない。もっと切迫感を持ったほうがいいと思いますね。

## 「安全」の意味とは

- 岡本 | だからね、震災や原発の例でもわかりますが、何が起こるかわからない。もしかしたら隣の国が突然日本を攻めてくるかもしれない。たぶん、起こらないだろうけれど、絶対にないとはいえない事象に対して、もちろん国としての対策は必要ですが、同時に個人のレベルでも「万一」の場合にどうするかということは少しだけでも考えておく必要がある。それを国が何とかしてくれるだろうと丸投げするのは間違いですよ。「座して死を待つのは嫌だ」と思うなら「いざ」というときの備えを自分で考えておくことです。それが選挙での投票行動で表現されたり、自分年金づくりになったり、あるいは海外に口座を持って資産の安全を図るというようなことになるのではないのでしょうか。
- 島田 | アジアの人って金(きん)を身に着けているじゃないですか。何かのときに着の身着のままでも金だけは残る。そういう緊張感が日本にはあまりないですね。
- 岡本 | オスプレーの配備が問題になっています。私はオスプレーが最適な機種かどうか、それが本当に戦略的に必要なかはわかりませんが、少なくともアメリカは「安全」のために配備を考えている。日本の反対派は「安全」の面でNOと言っている。同じ「安全」でも全然意味が違う。
- 島田 | そうですよ。もし、NOならそれに対してどのような対案があるかという点が抜けている。東日本大震災のような悲劇も、日本では結構風化が早い。原爆を広島と長崎に落とされたのに、すぐに「アメリカ大好き」になってしまう。最近の若い子は原爆を落とされたといっても「間違っって落としてしまった」ぐらいにしか理解していない。だいたい、日本とアメリカが戦争していたことだって知らない。
- 岡本 | つい、60数年前のことが遠い歴史上の事件になってしまっている。保元の乱や応仁の乱とはいわないけれど、少なくとも、日清・日露・第一次対戦と並列になってしまっている。それとともにその極限状態における体験も失われつつある。極限状態で得た生き延びる力も伝わらなくなっている。それは日本としては本当にもったいない。それゆえ、この企画には意義があると思ったのです。
- 島田 | のんびりとしていても、いつ、戦争が起こるかなんてわからない。特に今のような経済環境ですとね。私は、よく「今の日本はワイマールだ」と言っているんです。他力本願のまましていると、忘れたころに災難がやって来る。声の大きい先導者が出てきてみんながあおられる。方向を示してくれてみんながその方向に向かって走り出す。

岡本

今回の聞き取り取材で感じたことをまとめておきましょう。一つは戦中・戦後の極限状態は決して過去のものではなく、これからだっていつ起こっても不思議ではないということです。東日本大震災はそれを思い出させてくれました。この点はとにかく忘れないでほしい。そして、そのようなときにでも耐えられるように平和ななかでも「生き延びる力」を養っておいて欲しい。極限状態を体験するのは難しくても、たとえば必死に仕事をする、発展途上国で何年か仕事をしてみるというのもいいと思います。また、真摯に東北の復興活動に参加してみる。少なくとも極限状態の疑似体験をしてみるとことは意義があると思います。

そして、最後に「いざ」というときに生き延びられるように心構えを持つこと。もちろん、個人として、自分を守るための手段を講じることは当然です。しかし、それには限界がある。やはり、国というものの存在は大きいのです。ですから、個人、生活者として少しでも国や企業がよくなるような働きかけを続けていくことが非常に重要なのではないかと感じます。多くの方が戦中・戦後の体験をあまりお話になりたがりません。今回、取材に応じていただいた上田さんご兄妹、田中さん、鳥山さん、宮崎さんに深く感謝したいと思います。

# <モデルポートフォリオ:2022年8月末の運用状況>

単位: %

		トータルリターン				リスク	1万円ずつ積み立てた場合の 投資額に対する騰落率			
		1ヵ月	1年	5年 (年率)	10年 (年率)	10年 (年率)	1年 12万円	5年 60万円	10年 120万円	2000年1月 ~ 272万円
4資産型	積極型	0.10	4.42	8.66	12.74	14.30	2.57	28.76	63.15	146.71
	成長型	-0.15	2.73	6.05	9.34	9.65	1.67	18.96	40.88	101.13
	安定型	-0.39	0.96	3.29	5.87	5.63	0.72	9.53	21.12	60.87
2資産型	積極型	-0.20	5.66	10.67	13.56	15.40	3.01	36.93	76.22	187.38
	成長型	-0.42	4.09	7.66	10.30	11.03	2.29	25.22	50.46	128.75
	安定型	-0.64	2.38	4.50	6.96	7.40	1.49	14.06	27.78	78.26

\* 投資にかかるコストは控除していない。積み立ては、税引き前分配金再投資。ポートフォリオは毎月リバランスをしたものとする。積み立ては計算月数分を運用したものとする。例えば1年の場合は2021年8月末に1万円投資資金を積み立て始め、2022年7月末の投資資金までとする(2022年8月末積み立て分は運用期間がないため含めていない)。

出所: イボットソン・アソシエイツ・ジャパンがMorningstar Directにより作成。Morningstar Directについてのお問い合わせは、イボットソン・アソシエイツ・ジャパンのお問い合わせメール (<https://www.ibbotson.co.jp/contact-us/>) まで。

## ポートフォリオの資産配分比率(外貨建て資産は円換算ベース)

4資産型		国内株式: TOPIX	外国株式: MSCI KOKUSAI	国内債券: NOMURA- BPI (総合)	外国債券: FTSE WGBI (除く日本)	
		積極型	40%	40%	10%	10%
		成長型	25%	25%	25%	25%
		安定型	10%	10%	40%	40%
2資産型		世界株式: MSCI ACWI (含む日本)		世界債券: FTSE WGBI (含む日本)		
		積極型	80%	20%		
		成長型	50%	50%		
		安定型	20%	80%		

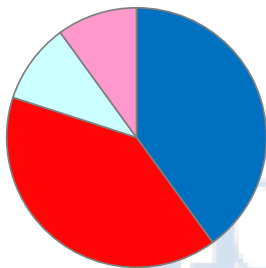
ポートフォリオは「インベストラ이프」が参考のために考案した資産配分に基づき、イボットソン・アソシエイツ・ジャパンがデータを算出しています。  
**特定の資産配分による投資の推奨を行うものではありません。**

「長期投資仲間」通信『インベストラ이프』のその他の記事はこちらからご覧ください。  
<http://www.investlife.jp/>

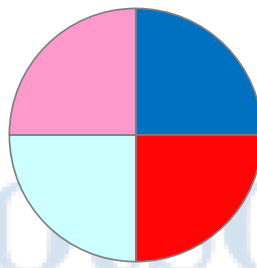
### 4資産型

- 国内株式: TOPIX
- 外国株式: MSCI KOKUSAI
- 国内債券: NOMURA-BPI (総合)
- 外国債券: FTSE WGBI (除く日本)

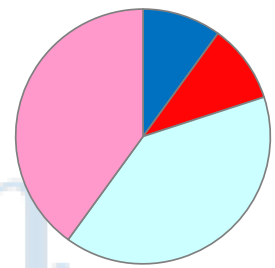
#### 積極型



#### 成長型



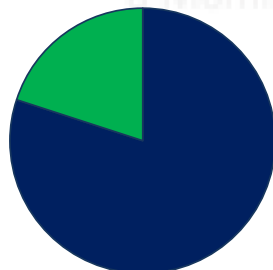
#### 安定型



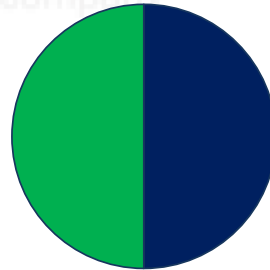
### 2資産型

- 世界株式: MSCI ACWI (含む日本)
- 世界債券: FTSE WGBI (含む日本)

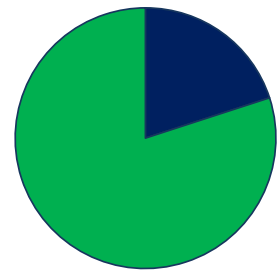
#### 積極型



#### 成長型



#### 安定型



<直販系ファンド:2022年8月末の運用状況>

当資料は「インベストライフ」のために、イボットソン・アソシエイツ・ジャパンがデータを算出、作成しています。  
特定の投資信託による投資の推奨を行うものではありません。

運用会社名	ファンド名	トータルリターン				リスク 10年 (年率)	1万円ずつ積み立てた場合の 投資額に対する騰落率				1万円ずつ積み立てた場合の 月末資産額				2022年8月末		2022年 5月末	2022年 8月中
		1ヵ月	1年	5年 (年率)	10年 (年率)		1年 12万円	5年 60万円	10年 120万円	2000年1月~ 272万円	1年 12万円	5年 60万円	10年 120万円	2000年1月~ 272万円	純資産 (億円)	基準価額 (円)	(前回掲載時) 基準価額 (円)	推計資金 純流入額 (億円)
さわかみ投信	さわかみファンド	2.58	-0.78	5.75	12.41	17.81	2.20	18.10	47.81	215.21	12.26	70.86	177.37	573.69	3,475.7	31,233	30,038	-9.98
セゾン投信	セゾン・バンガード・ グローバルバランスファンド	0.45	5.35	7.32	9.86	11.20	2.97	24.83	47.24	—	12.36	74.90	176.69	—	3,295.6	19,767	19,344	27.61
セゾン投信	セゾン資産形成の達人ファンド	0.31	-0.16	10.69	15.64	19.00	0.93	32.60	83.84	—	12.11	79.56	220.61	—	2,056.3	31,274	30,125	21.31
レオス・ キャピタルワークス	ひふみ投信	1.95	-12.89	4.70	15.46	17.99	-4.49	7.52	62.47	—	11.46	64.51	194.96	—	1,412.7	55,367	54,837	-3.61
鎌倉投信	結い 2101	1.44	-5.27	2.62	7.08	9.72	0.44	4.81	22.38	—	12.05	62.88	146.85	—	488.1	20,344	19,602	1.69
レオス・ キャピタルワークス	ひふみワールド	1.01	-5.90	—	—	—	-1.96	—	—	—	11.77	—	—	—	405.4	15,534	15,269	-0.50
コモنز投信	コモنز30ファンド	1.61	-1.64	7.81	13.09	17.58	0.06	24.64	63.44	—	12.01	74.78	196.13	—	363.9	37,680	37,042	3.83
ありがとう投信	ありがとうファンド	1.50	-9.59	7.29	12.04	17.44	-4.03	23.94	56.25	—	11.52	74.37	187.50	—	170.4	25,394	25,190	-0.07
ユニオン投信	ユニオンファンド	-0.10	-1.39	4.33	9.37	16.21	-0.11	17.13	37.78	—	11.99	70.28	165.34	—	102.4	29,956	29,481	0.41
クローバー・ アセットマネジメント	コドモファンド	-0.01	-8.31	4.80	—	—	-3.88	10.08	—	—	11.53	66.05	—	—	92.9	20,800	20,498	-2.03
コモنز投信	ザ・2020ビジョン	2.17	-11.16	10.97	—	—	-3.07	27.01	—	—	11.63	76.21	—	—	73.2	22,729	21,913	0.57
レオス・ キャピタルワークス	ひふみらいと	-1.35	-8.81	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	29.9	9,314	9,495	0.52
セゾン投信	セゾン共創日本ファンド	0.71	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	23.6	10,447	10,078	0.81
クローバー・ アセットマネジメント	浪花おふくろファンド	-0.44	-9.70	4.70	11.29	15.04	-3.83	9.48	42.75	—	11.54	65.69	171.30	—	14.9	24,253	23,616	0.07

\*積み立ては税引き前分配金再投資、計算月数分を運用したものとします。例えば1年の場合は2021年8月末に1万円で積み立てを開始し、2022年7月末投資分までの8月末における運用成果とする(8月の積み立て額は入れない)。

出所: MorningstarDirect のデータを用いてイボットソン・アソシエイツ・ジャパンが作成。MorningstarDirectについてのお問い合わせはイボットソン・アソシエイツ・ジャパンのお問い合わせメール(<https://www.ibbotson.co.jp/contact-us/>)にてお気軽にご送信ください。